

20. 国土強靱化とは

防災対策というと、国土強靱化という言葉が必ず出てきますが、強靱化とは何か、あるいは必要なかをあまり深く考えないで肯定されているような気がします。強靱化とはそもそも、強くしなやかで粘りがあるということから、自然現象に対してわが身を守る鎧をイメージしてしまいます。確かに、現有するものに対して機能を向上させるということなのかもしれません。しかし、その強靱化がどこに、どの程度に合わせるのかを思うと、少々自然現象に対して無謀なような気がします。つまり相手を敵として試しているとすると、自然現象について、われわれはあまりにも情報が少な過ぎるのではないのでしょうか。これまで経験していないとか未曾有のことが多すぎます。そう考えると、大事なことは国土を適切に利活用して、自然と共生しながら生きるすべてをその中で考えていくことではないのでしょうか。つまり暮らし方という視点で考えていく必要があるような気がします。人口減少とか高齢化に代表されるように社会は大きく変化していますので、これまでと同じような屋上屋を架するようなことを営々と続けていくことを考え直し、より安全で安心な暮らし方とは何かを案出して、次世代へつないでいかなければなりません。先の2022年1月15日のトンガ沖での火山活動を例に考えてみると、どうしても被害や犠牲の多寡だけに目がいてしまいますが、大事なことはこれまで経験していないことが起きたときのわれわれの対応、生き方であると感じています。今回の噴火は、規模的には1000年一度というような大規模なものだったようですが、まれにしても起きるといふことの実、それによる影響は多様で人類が経験したことの無いこともおきうるということです。そして、その時の社会構造が被害に反応するということです。

今回のものは、海中での火山噴火によりマグマが水に接触して破裂して、火山灰が大量に噴出する爆発に発展したようで、約9万年前に爆発した阿蘇山火山噴火に匹敵する大規模なものだったとも考えられています。この海外での爆発による空振が、津波を引き起こしたということですが、経験が無かっただけに、まさに想定外ということで警報にも戸惑ったものでした。つまり、自然災害のすべてはこれまでの経験内、メカニズムも明らかになっているというものではないことを、改めて知ることになりました。これを見ると、いかに人間が自然のなかに生かされている小さな存在であるかを痛感しつつ、過去にも大規模な火山噴火が気象変化をもたらした例もあり、今後の気象への影響が懸念されます。自然災害は自然現象の発信地付近だけでは納まらずに広い範囲にさまざまな現象として、中長期的に亘って発現します。それだけ自然の

システムは精密で複雑になっているわけで、まさに緻密な因果関係を想起してしまいます。